

## ソフトバレーボール審判講習会実技資料 NO2

### (プレー毎の主審・副審・線審・記録員の役割分担)

#### 「サービスの吹笛」

<b>主審</b>
<p>両ベンチを見て、競技中断の要求の有無を確認する。</p> <p>レシービング・チームの4人がコートに入っているか、サーバーがボールを保持しているか、確認してから許可の吹笛をする。</p> <p>サービス時の反則、サービング・チームのポジショナル・フォルト、スクリーン等を確認する。</p> <p>片方の手をネット上端に置き、目の位置を下げて目でも確認してサービス・ボールのネット・インを確認する。</p>
<b>副審</b>
<p>競技中断の要求に注意する。</p> <p>レシービング・チームのセッターの位置が、フロントかバックかを確認する。</p> <p>レシービング・チームのポジショナル・フォルトの有無を確認する。(保持しているライン・アップ・シートで確認)ポジショナル・フォルトがなければ、ボールに目を移し、ボールがネット上端に触れるのを確認する。主審が確認できない場合は合図を送る。</p>
<b>線審</b>
<p>担当のラインから1～0.5メートル離れてフリー・ゾーン内に位置する。</p> <p>アウト・オブ・プレイの時は、直立(自然体)の姿勢でリラックスする。</p> <p>サービス時も低い姿勢になりすぎないように、ややひざを曲げる程度で、サーバーのフット・フォルトを注視する。</p> <p>サーバーがサイド・ライン延長線上でサービスをする時は、サーバーの後方に下がって、一歩横に出る。サービス終了後は素早く定位置に戻る。</p>
<b>記録員</b>
<p>得点を確認する。</p> <p>サービス順を指さし確認する。</p> <p>ロング・サーバーを確認したら、サービスを打った瞬間に主審、副審に知らせる。</p> <p>疑わしい時は、ゲームを止めて確認する。</p>

#### 「サービス・レシーブ」

<b>主審</b>
<p>サービス・ボールがネット・インかどうか、やや目線を下げて手の感触と目で見て確認する。</p> <p>サービス・ボールがライン際に落下する場合は、「アウト」か「イン」かを確認してから、ライン・ジャッジの判定を確認する。</p> <p>サービス・ボールがレシーバーにかすかに触れていくケースに注意する。</p>
<b>副審</b>
<p>サービス・ボールがネットを越えたら、ブロック・サイドに素早く移動する。</p> <p>プレーを読んでポジショニングをする。(セッターのトスがA・B・C等で上がるか、アタッカーは誰が打つのか、ブロックは誰がするのか)</p>
<b>線審</b>
<p>サーバーがボールを打ったら、ひざを曲げて移動しやすい姿勢でボールを追う。ボールが</p>

自分の担当ライン付近に来たならば、低い姿勢で目線を下げてラインとボールの接点を見る。目の位置が高いとボールを上から見ることになり正確な判定ができない。

記録員

## 「スパイク時」

主審

必ず静止して見ること基本的に両アンテナの延長戦に目線を置き、左右の動きはボール 1 個分くらいとし、横に出過ぎない。(オーバー・ネットの判定と次のプレーへの対応のために。)

オープン・アタックは高い位置から広い視野で見ること。アタッカーとブロツカーとボールを視野に入れる。(アタッカーのキャッチ・ボール、ブロックのボール・コンタクトやタッチ・ネット、ブロックから跳ね返ったボールがアタッカーに当たるケースを予測)

A・B・C・Dクイックはトスがネット際に上がるので、ボールを見ながらネット上に目線をおき、ブロツカーやセッターのオーバー・ネット、ブロックのボール・コンタクトを見て、レシーバーのボール・コンタクトとライン判定をする。(プレーを先読みすること。)

Tip Play は、プレーの先読みをして、ネットに目線を残す気持ちを持つと正確な判定できる。

副審

攻撃のプレーを読んでポジショニングをして、必ず静止してネット際を監視する。(基本はブロツク側に位置する。)

ネットとスパイクとブロツカーを視野に入れて、特にタッチ・ネット、ペネトレーション、そしてブロツカーのボール・コンタクトを見るためネット際を集中して見る。

ネット際にプレーヤーがいなくなったら、ボールを見て次のプレーに備える。

タッチ・ネットの判定があいまいになっている。ブロツク後のタッチ・ネットは少ない着地と同時のタッチ・ネットは反則である。

線審

ライン判定やブロック及びレシーバーのボール・コンタクトを見るケースは、まずスパイクの打っ方向やブロツクの位置関係を考えて判定する。

記録員

## 「ブロック時」

主審

ブロッキングのキャッチ・ボールの判定の仕方は、ネット上に目線を残す気持ちでボールを見るとよい。

相手チームへの返球の時、ブロックのような動作で行う場合はキャッチ・ボールの反則があるので注意する。

ブロックのボール・コンタクトで主審の死角となるコースはブロックの間と、副審サイドであることを理解する。

ブロツカーのオーバー・ネットは、アタッカーのタイミングが遅れたときにおきやすい。

ネット上に目線をおきボールと手の接点を見て判定する。

副審

ブロツカーのタッチ・ネットは、ブロツカーが移動するとき、着地と同時の時があるので、ネット際に集中し静止して見ること。

ブロックサイドからネット際を監視するが、必ず静止してネット際に集中し、ブロツカー

の手からセンター・ラインを視野に入れる。  
ブロッカーのボール・コンタクトで死角となるのは、ブロックの間と主審サイドである。

#### 線審

ブロッカーのボール・コンタクトは主審・副審の死角となるコースを理解することが大切である。  
主審及び副審サイドでのブロックでかすかにブロッカーの外側をねらって打ってくる場合は、手に集中する。また、ボールがアンテナに当たったり、ブロックの後にアンテナに触れたりするケースは、最後にボールに触れたプレーヤーを確認することに集中すると正確に判定ができる。また、主審に送る判定の合図の仕方をミーティングで確認する。

#### 記録員

### 「ラリー中の位置の取り方」

#### 主審

基本的には、ボールに身体を正対させて見る。ボールのあるサイドにボール1個分位身体を移動させるが、極端に横へ移動しない。ボールを中心として移動する。  
肩の力を抜いて、プレーの1つ1つを確認するが、特にネット際では緊張し、ボールがバック・ゾーンにある時はリラックスするリズムを持つこと。  
目の位置は、料アンテナを結んだ線上におくことを基本として、プレーに応じて、上下、左右に移動するが、極端な移動はすべきではない。  
ネットから離れたアタック・プレーは若干アタッカー側に身体を移動してアタッカーのプレー、ブロッカーの手及びボールが視界に入るようにする。目の位置が低くなるとボール・コンタクトや次のプレーを見るタイミングが遅れる。アタッカーから目をは離すとキャッチ・ボールの反則の見逃しがあるので注意する。  
自分のリズムを作り、1つ1つのプレーを瞬間的に目の動きを止めてボールを注視することが大切である。

#### 副審

ひざを曲げた姿勢で、常に次のプレーに対応して動けるようにする。瞬間的に身体をボールのコースに移動したり、プレーヤーの邪魔にならない位置に移動して、必ず静止して見る。  
プレーに応じてボールから1.5m～2m程度動いて監視する。  
主審サイドでの攻撃はサイド・ライン近くまで移動する。  
ラリー終了後、両チームのプレーヤーがネットをはさんで暴言や威嚇行為をしていないか確認する。  
タイム・アウトやサブステーションの要求に注意を払う。

#### 線審

アウト・オブ・プレー時は、自然体の直立でリラックスしているが、イン・プレー中は、ひざを曲げて移動しやすいやや低い姿勢を作るが、低い姿勢(ライン判定するとの時と、そうでない時の区別をつける。

#### 記録員

プレーを見て主審の最終判定を確認してから記録する。判定上のトラブルがあれば主審の最終判定を確認してから記録する。  
タイム・アウトやサブステーションの手順を正確に行う。特に、サブステーションが複数の場合の手順を正確に行う。正規のサブステーションであることが確認できたら、片方の手を挙げて交代許可の合図を送り、記入完了したら両手を挙げる。複数の時

も同時に行い、交代プレーヤーは副審の後ろに待機する。  
競技中断の不当な要求は副審と主審に通告する。

## 「ボール・ハンドリング ボールイン・アウト」

### 主審

基本的にはすべてのプレーのハンドリング基準は同一であるが、ファイン・プレーのハンドリングはゲームの流れを大切にされた方がゲームの運営はよい。

オーバー・ハンドの反則プレーは、左右の手のばらつき、指先から手のひらに当たるケースである。アンダー・ハンドの反則はボールが手のひらで止まったり、指が引っかかったりするケース。

トス・プレーで手の中に止まるか、キャリアの長いプレーは反則である。ヒットしなければならぬ。しかし、一連の流れのあるプレーは反則にすべきではない。

ワンハンド・トスで指と手のひらとの間でのバラツキや手の平で転がるプレーはダブル・コンタクトである。

床にボールが落ちたかどうかは低い姿勢で見るが、確認できない場合は、副審や線審を素早く見て判定する。

主審は審判台からボール・イン、アウトの判定基準を持つこと。ライン判定は担当のラインジャッジを確認してから判定する、判定をしてから覆すことはさけること。

### 副審

ボールが床に落ちたかどうか主審が確認できないケースは、確実に床に落ちている場合は吹笛する。ネット・タッチが起こりそうもないケースはボールを見ること。

アタックまたはレシーブされたボールがアンテナ外の上方を通過したときの位置取りは、基本的にはボールの後ろとするが、プレーヤーの邪魔にならなければボールのコースに入って判定する。ラインジャッジとの協力が必要である。

副審はラインジャッジではないのでライン判定はしない。

### 線審

公式フラッグ・シグナルを使用して、それをしばらくの間続ける。(主審が受け入れない場合は直ちにやめる。)フラッグ・シグナルを出す場合は、身体とフラッグはラインに向け顔を主審の方向に向ける。

フラッグ・シグナルは主審の吹笛と同じ意味を持つので、主審の吹笛と同時にシグナルを示す。

ライン判定は構えの姿勢から1歩前を出て、直立の姿勢から前足に後ろ足をそろえて、ボール・アウトの時はフラッグを真上に音が出るように挙げる。(フラッグの柄に人差し指を添えて握る。)ボール・インは同様にフラッグを下げて指す。この際、ひじを曲げない。ボール・コンタクトはフラッグを顔の前よりやや高めに旗を立ててシグナルを送る。明らかなボール・コンタクトのみシグナルを送る。

ボールがライン付近に落下する場合の判定方法は、最初ボールを見てボールがライン近くにきたらボールから目を離して、ラインを見てラインとボールの接点を見て判定する。

コート1・5m以内は必ず判定する。コート・コーナーの内外の判定は2人(線審4名配置した場合)のライン・ジャッジの判定が食い違っても最終判定は主審が行う。

### 記録員